

ADHD 傾向を持つ青年の非行傾向と 自己制御機能との関連について

——青年の DBD マーチ傾向と実行機能との関連を中心に——

荒 駒 真 輝

本研究では、成人用エフォートフル・コントロール尺度（以下、EC 尺度）を用いて、青年の DBD マーチ傾向と実行機能の問題との関連について検討する。そして、本研究における仮説「注意欠陥／多動性障害（以下、ADHD）傾向の高いものほど、EC に問題があり、反抗挑戦性障害（以下、ODD）傾向を高める。そして、ODD 傾向の高さは行為障害（以下、CD）傾向を促進させる」を検証する。

質問紙による調査を行い、質問紙はフェイスシート、ADHD-RS-IV 日本語版、EC 尺度日本語版、CD 傾向尺度、ODD 傾向尺度で構成された。質問紙の配布は 2013 年 7 月下旬から 10 月下旬に行った。調査協力者は 18 歳～30 歳までの青年男女で、有効データ数は男性 210 名、女性 368 名の計 578 名であった。平均年齢は 20.40 歳であった。

因子分析による結果、ADHD-RS-IV 日本語版では「集中困難」、「多動性・衝動性」の 2 因子、EC 尺度では「注意・先見性の制御」、「行動始発の制御」、「行動抑制の制御」の 3 因子、ODD 傾向尺度は「ODD 傾向」の 1 因子、CD 傾向尺度は「ルール破り」、「他罰的行為」の 2 因子が抽出された。そして、共分散構造分析を用いて、仮説を検証した。その際、対象を ADHD 傾向あり群のみに絞った。仮説検証の結果、男性 ADHD 傾向あり群では、「集中困難」→「EC」→「ODD 傾向」→「CD 傾向」という流れが明らかとなった。しかし、女性 ADHD 傾向あり群においては、「集中困難」→「EC」という流れは確認できたものの、「EC」→「ODD 傾向」という流れは確認できなかった。また、「ODD 傾向」→「CD 傾向」という流れも確認できず、女性 ADHD 傾向あり群においては「ODD 傾向」→「ルール破り」、「他罰的行為」とそれぞれ独立して影響していることが明らかとなった。また、男性 ADHD 傾向あり群では、重回帰分析の結果、「行動抑制の制御」の問題が「ODD 傾向」と関連があることが明らかとなった。

以上の結果から、ADHD 傾向→ODD 傾向→CD 傾向の DBD マーチ傾向における要因としての実行機能である「EC」の問題は ADHD 傾向のある男性においてリスク因であり、特に「行動抑制の制御」が大きな要因の 1 つであるということを示しているといえよう。一方で、ADHD 傾向のある女性においては、ADHD 傾向があると実行機能の問題が存在するが、実行機能の問題が要因となって ODD 傾向に至り、CD 傾向へと重症化していくわけではなく、別の要因が関連して ODD 傾向へと至り、さらには「ルール破り」や「他罰的行為」といったより重い行為へと至るということを示しているといえよう。